

初年次教育のさらなる普及活動の試み

藤本元啓

崇城大学

学生の学修意欲や基礎学力の低下、学修環境への不適應等は、大学教育の質保証そのものにつながり、大学の社会的信頼にまで影響を及ぼしている。初年次教育学会が設立したのは、これらの問題に対する解決策を見出そうとする高等教育関係者の要請でもあったといつてよい。そしてその設立趣意書において「情報交換と研究・実践交流の場として」「プログラムの開発に関心を寄せる人々のネットワーク」になることを宣言したのである。

文部科学省の調査によると、2014年度に初年次教育を実施した大学は710(実施率96.1%)に及ぶ。これは初年次教育の大学教育における定着化とともに、我が国のほとんどの大学が大学学修にスムーズに移行できない学生に悩む実態をも示している。その教育内容は、文章作成、ノートの取り方、口頭発表の技法、学問や大学教育全般に対する動機付け、論理的思考や問題発見・解決能力、職業生活や進路選択に対する動機付け、社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観、精神的・肉体的健康の保持、時間管理や学修習慣、学内教育施設の活用方法、大学への帰属意識など多岐にわたる。

これら多様な教育情報を得る機会として年次大会があり、毎回400名を超える参加者がある。会員向けの調査(本誌第8巻1号参照)によると、「大会時での情報交換」「地域別での情報交換」に「大いに期待する・期待する」が各々93%、73%であり、大会には及ばないが地域別での開催ニーズを確認できる。この要望を予測し、2013年度から地域活動活性化委員会を中心に特定のテーマを掲げ、原則として、開催大学およびその近隣大学における実践事例報告、ワークショップ、パネルディスカッション、フロアとの意見交換等で構成する「初年次教育実践交流会」を開催している。毎回70名程の参加者があり、質疑も活発である。2017年度は北陸と関西での開催が決定している。

また、初年次教育を教員だけで担当するのはもはや現実的ではなく、職員との協働が相応しいプログラムも多い。筆者はこの4年間、大会のラウンドテーブルにおいて「初年次教育における職員の役割について—職員主体と教職協働—」を企画してきた。内容は毎回2大学が実践事例(入学前教育、学習相談、ライティング、教科書教材・シラバス作成、自習教材の提供、初年次教育会議・FD運営、授業アンケート分析等)を話題として提供し、参加者の所属大学における事例も交え、成功・失敗例、プログラム計画、運営上の悩み等の情報交換を本音で行っている。SDの要素もあるためか、報告者・参加者ともに職員の方がほとんどで、毎回40名程の規模になっており、次回大会でも開催を予定している。

今後も可能な限り会員及び地域の要望を受け入れ、初年次教育のさらなる普及とネットワーク・コミュニティ形成とに努めたい。多くの教職員各位の参加、事例報告、問題提起、意見交換等に期待している。

(初年次教育学会常任理事・地域活動活性化委員会委員長・事務局幹事)